

故宮を出て5～6分歩くと「張氏帥府博物館」の前に出る。ここは北方軍閥の首領であった張作霖とその息子の張学良の官邸兼私邸である。この2人について述べると、とても紙幅が足りないが、一言でいえば近代中国の寵児である。張作霖は、馬賊から一代で身を起し、1926年(昭和元年)には北京で軍事政権を樹立するに至る。しかし、1928年に北京から帰るときに、日本軍の仕掛けた爆薬により命を失った。日本軍は中国人のアヘン中毒者を犯人に仕立てるといった卑劣なことまで行った。瀋陽では近代に二つの有名な事件が発生している。

一つはこの「張作霖爆殺事件」であり、もう一つは1931年9月18日に瀋陽駅(当時奉天駅)の北東7kmのところの柳条湖で発生した事件である。ご承知のように関東軍が南満州鉄道の柳条湖付近の線路を爆破し、中国側の仕業だと喧伝した事件で、これが満州事変の引き金となったものである。そして翌1932年に満州国が建国され、日本は抜き差しならない状況に陥っていくわけである(前回の長春市で記載した年表を参照してください)。

こうしたことが続いたためであろうが、瀋陽は対日感情があまりよくない土地である。最近では尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件が発生したとき、瀋陽や長春では反日デモが起きた。日本漁船が、中国の警備艇にわざとぶつけ、中国側が悪いと強弁すればいったいどんな騒ぎが起きるのであろうか。

この張氏帥府博物館であるが、私はこの建物の大きさとデザインに圧倒された。1922年に完成したこの建物は「大青楼」と呼ばれ、中華バロック様式の外観とガイドブックに出ている。中華バロック様式といわれて



張学良像

もよく分からないが、この3階建てとも4階建てとも思しき建物は、ベージュ色の外観で1階はギリシャの神殿に似た柱で2階のバルコニーを支えるようなデザインである。中国国内には他では見られない建物で、その前に立つと時代を超えて張作霖の意気込みが充分伝わってくる。

この博物館の入り口付近には、息子の張学良の等身大の銅像が帥府を守るように立っている。石の台座には張学良將軍と刻まれている。彼は蒋介石を軟禁するという西安事件(1936年)を起こし、抗日運動に身を捧げていくわけであるが、翌年蒋介石にとらえられた。そして幽閉されたまま中国各地を転々としたあと、台湾まで連行されていくが、時代が変わってもなぜか軟禁状態は続いた。1991年、彼が90歳の時開放され自由の身になったが、何ともひどい仕打ちではないか。半世紀以上も軟禁され続けたのである。開放された後はハワイに渡り2001年に逝去している。ちょうど100歳であった。国のために立ち上がった男にどうしてかくまで……と思うと深い同情を禁じ得ない。ついこのあいだの出来事である。

あちこち歩き廻ったので昼食をとりながら一休みする。友人が、

「近くに中街というにぎやかな通りがあり、そこには何でもある」

と言うのでそこに向かった。そしてここでは老辺餃子館という店が有名だとのことこの店に入った。2階に上がりドアをあけて入ると、大勢の人が食事をしている。

この店は1829年に創業というから、餃子ひとすじに180年余り続いていることになる。メニューを見



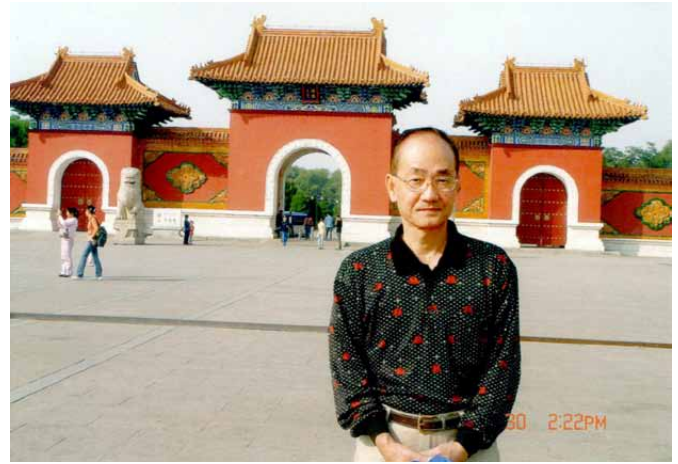
瀋陽中街



瀋陽中街

ると何と何十種類もの餃子のオンパレードである。中国はやはり蒸し餃子なので、二、三種類頼むと皿いっぱい盛られたのが来てとても食べきれない。そのうち男性従業員が各テーブルにお茶を注いでまわっている。見ると注ぎ口が1m半くらいの長さの如雨露に似た容器を肩の後ろから背負うようにして上手にこぼさないように湯呑についでいる。これを見るだけでも、来た甲斐があったと思った。食べ物の話になったので付け加えると、瀋陽駅から北東に2kmくらいのところにコリアンタウンがある。ハンガルの看板が軒を連ねており、この通りはどう見ても中国にいる感じではない。何でも1992年に中韓国交樹立を機に韓国の人が大勢住みつき、今では世界有数のコリアンタウンに変貌したようだ。瀋陽に到着した日の夕食はこの通りにあるコリアンレストランでビビンバとキムチ鍋に舌鼓を打った。

昼食後は「9.18 歴史博物館」を見ることにした。前述したように1931年のこの日関東軍は柳条湖の線路を爆破した。この事件が起きた場所に建てられたのがこの博物館である。巨大なカレンダーをイメージしたコンクリート製の建物には「9.18」という文字が彫り込まれている。この建物の横には新しい博物館があり、例によって江沢民が書いた文字が掲げられている。抗日教育に力を注いだ江沢民は、各地のこうした施設に必ずといってよい程、自筆の文字を掲げさせている。中に入ってみたが、これでもか、これでもかというくらい日本人として目を背けたくなる展示物でいっぱいであった。



昭陵入り口

本日の最後は「昭陵」である。ここは清朝第2代皇帝のホンタイジの陵墓である。市街地の北に位置するため北陵と呼ばれ、また娯楽施設も設置し、北陵公園として市民の憩いの場となっている。とにかく広大な敷地で入園券を買って中に入るとそこには10人乗りくらいの電気自動車乗り場がある。歩いても大したことはなかろうとまっすぐ続く石置の道を歩くと、ようやくホンタイジの見上げるような銅像の前に来る。よろいを着たいかにも強そうな武将像である。

また歩き出すがなかなか目指す建物まで行けない。そのうち人工の大きな湖が現れそこに橋がかかっている。それを渡るとようやく昭陵の正門である隆恩門がある。その奥には四隅に、角楼という見張り台のような建物があり、荘厳な雰囲気醸し出していた。そして大きな建物の前に行き着く。その中でも墓があるのかと思っていると、その後ろに白い小山があり、それがホンタイジとその妃の墓ということが分かった。ちょうどおわんを伏せたような形である。ここに眠っているのかと手を合わせた。帰りは少し待って電気自動車に乗り込んだ。なお、初代皇帝のヌルハチの陵墓は福陵と呼ばれ、市の中心部から東の方角にある。清朝は3代目の順治帝から始まるが、3代目以降の皇帝の陵墓は、北京郊外の東陵と西陵に分かれて埋葬してある。

瀋陽は、まだ観光するところはたくさんあるが、今回の旅は三日目の午前中の五愛市場までとした。ここは日用品の卸売市場で安いので有名らしく、大連日通の社員は皆よく知っていた。中国語で卸売を意味する「批発店」という看板があちこちにある。私もシャツやベストを買ったが本当にビックリするくらい安く得をした気分となった。そして荷物を片手に大連に向かう「新空調軟座特快」に乗り込んだ。(終)